

## イエスのことば 第12回

イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた（マルコ 1 : 25）

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わすも、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架、復活、昇天

□文脈の確認

1. 前々回から、「承」の部に入った。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。

(1) 前々回は、病の癒しに関する権威を現わした出来事、カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。

(2) 前回は、教えに関するメシアの権威を示した出来事であった。ルカ 4 : 32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」。

2. 今回は、**悪霊に対するメシアの権威**を示した出来事である。

□本日のアウトライン 聖書箇所 マルコ 1 : 21~28

A) 悪霊とは

B) 安息日における悪霊の追い出し（マルコ 1 : 21~28）

A) 悪霊とは

1. サタンに従って墮落した天使たち

(1) 天使・・・神が造った霊的存在。軍隊のような階級組織になっている。

(2) サタン・・・天使たちの中で最も優れていて、最上位にいた天使。自分の美と輝きに高ぶり、他の天使たちを抱き込み、自ら神のようにふるまったとき、彼はサタンとなった（参考 エゼ 28 : 12~17）

(3) 墮落した天使たち・・・天使たちのうち、三分の一の天使がサタンの配下について、神に敵対するようになった。彼らが、墮落した天使である。

① 新約聖書では、「ダイモニオン」（ルカ 4 : 33）、「汚れた霊」（1 : 23）、「悪い霊」（1 : 32）などと呼ばれる。

② 墮落前と同様、階級組織を維持している。→ エペソ 6 : 12 「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです」 波線部は後述

- (4) 聖なる天使たち・・・天使たちのうち、残った三分の二は、サタンに従うことなく、神に従い続けた。彼らを、墮落した天使たちとは区別して、「聖なる天使たち」と呼ぶこともある。旧約聖書で神の名として「万軍の主（ばんぐんのしゅ）」とあるが、これは、「万軍＝多数の聖なる天使の軍勢 を従えている神」という意味である。
- (5) 聖書で「使い」というとき、聖なる天使を指す場合と墮落した天使を指す場合がある。どちらなのかは、文脈で判断する必要がある。墮落した天使、すなわち悪霊を指すケースは、次のとおりである。
- ① ロマ 8 : 38 「御使いたちも、支配者たちも、・・・私たちの主イエス・キリストにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」
    - 「支配者たち」・・・原文は 2 語、「アルケー（支配）もデュナミス（権力）も」、いずれも複数形で記されている。「支配たち、権力たち」、これらは、聖なる天使または悪霊の上位階級の呼称である。
  - ② コロ 2 : 18 「御使い礼拝」：これは「天使礼拝」であるが、聖なる天使であれば人間の礼拝を受けない（黙 19 : 10、22 : 9）。天使礼拝者が見る幻に登場するのは、実際は、悪霊である。
  - ③ IIペテ 2 : 4 「罪を犯した御使いたち」、聖なる天使は罪を犯すことができない。この文脈では、創世記 6 : 2、人間の女性と雑婚するという罪を犯した墮天使たち。次の④も同じ。
  - ④ ユダ 6 「自分の領域を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたち」
  - ⑤ 黙 9 : 11 「底知れぬ所の使い」、下線部は悪霊が一時的に閉じ込められる霊的場所を指す（参考 ルカ 8 : 31）。
  - ⑥ 黙 9 : 14～15 「つながれている四人の御使い」、聖なる天使であれば、つながれることはない。

## 2. 悪霊の特徴

- (1) 悪霊は霊的存在である。どんなに数が多くても、小さなスペースの中に入ることができる（ルカ 8 : 30）。
- (2) 物質的な体を持たない（マタイ 12 : 43～45、マルコ 5 : 12）。霊なので、血や肉は持たない（エペソ 6 : 12）。
- (3) 人の目に見える姿で現れるときには、明確な形と容貌をしている。結婚適齢の若い男性の姿で現れる事例（創 6 : 2）だけでなく、動物に似た外観を持つこともある（黙 9 : 7～10、16～19）
- (4) 人間の体の中に入って、その体を所有しようとする（マルコ 5 : 1～13、使徒 16 : 16、19 : 16）

## 3. 悪霊の力

- (1) 人を内側からコントロールすることができる (マルコ 5 : 1~5、使徒 19 : 16)
- (2) 人を苦しめる、さらには殺すことができる (黙 9 : 1~21)
- (3) しるしを行うことができる (黙 16 : 14)
- (4) 人の目に見えるように現れることができる (黙 9 : 7~10、17~19、16 : 13~14)

## 4. 悪霊の倫理性

- (1) 「汚れた霊」と呼ばれるのは、倫理的に汚れているからである。
- (2) 「悪い霊」と呼ばれるのは、その性格が邪悪だからである。
- (3) 狂暴で癖が悪い (マタ 8 : 28)
- (4) 下品であることが汚い (ルカ 9 : 39)
- (5) 悪習慣化して、しつこい (マルコ 9 : 20~22)
- (6) 偽物の教理体系を持っている (I テモ 4 : 1~3)
  - ① 信仰から離れさせる
  - ② 心を奪う=誘惑して快樂の中に陥らせる
  - ③ 偽善的な生活をさせる
  - ④ 偽りを言わせる
  - ⑤ 良心を働かせないようにする
  - ⑥ 結婚や食べ物分野で、信者の自由を否定する
- (7) 不道德な状態からさらにひどい不道德へと落ち込ませる (ルカ 8 : 27)
- (8) 悪霊たちの悪さの程度は、皆同じではない。悪霊の中でも、悪さの程度に応じた序列がある (マタ 12 : 43~45)。
- (9) 「このアイオンの暗闇の『コスモクラトル (この世の支配者たち)』」(エペソ 6 : 12) として活動していて、狡猾に社会全体を欺き、誘導する
  - ① サタンが支配し動かしているものがある。その名は「このアイオンの暗闇」
  - ② アイオンは英語では **age**、日本語では「世」と訳されるが、この世、この世界、というときの「世」はコスモスである。ではアイオンとは何か。
    - エペソ 2:2「この世コスモスの流れアイオンに従い」・・・アイオンとは、この世コスモスの中にサタンが仕込む各時代の流行や価値観である。時代によって、哲学であったり、宗教であったり、イデオロギーであったり、個人主義であったり、現代は、さしずめ経済第一であろうか。それぞれの時代において人々が追求する価値観、それぞれの時代精神を反映する「流れ」、それがアイオンである。
  - ③ サタンがアイオンを仕込む目的は何か。それぞれの時代にあって、手を変え、品を変えて、人間の関心を真の神から引き離すことにある。サタンを指して、「このアイオンの神」(II コリ 4 : 4) と呼ぶのは、そのためである。アイオン

は、一見、その時代の花形であり良いもののように見えるが、その本質は社会全体を欺き、誘導して、神から引き離す、暗闇の流れである。

- ④ サタンの指示に従い、この流れを実際に動かしているのは、悪霊たちである。その悪霊たちを指して、「このアイオンの暗やみ」の「コスモクラトール（この世の支配者たち）」と呼ぶ。それぞれの時代で注目を浴びる、いわゆる「時代の寵児たち」は人間であるが、その背後にはコスモクラトールと呼ばれる悪霊たちが働いている。

## 5. 悪霊の活動

### (1) 活動が顕著になる時期は歴史的に2回

- ① メシアの初臨の時期：福音書では悪霊に憑かれた人々が多く登場する。メシアが地上に現れるとき、サタンは天にいた悪霊たちを全員、メシアの周辺に動員した（黙 12：4）
- ② 大患難期＝メシアの再臨が近づく時期（黙 9：3～11「いなごたち」、15～19「2億の騎兵」）

### (2) 活動目的

- ① サタンの指揮下にあつて
- 聖なる天使の働きを妨害する（ダニ 10：13）
  - 人間を扇動して、神に反抗させる（黙 16：12～16）
  - サタンの権威をコスモス（この世）に広げる（エペ 2：1～2、6：11～12）
- ② 神によって用いられることもあった（Iサム 16：14、I列 22：19～23）

### (3) 活動内容

- ① 諸国民を支配する（ダニ 10：13、20）
- ② 人の身体に病弊を起こさせる（すべての病気が悪霊から来るわけではない）
- ③ 精神異常を起こさせる（マルコ 5：1～5、ルカ 8：26～27）
- ④ きわめて大きな体力を発揮させる（マルコ 5：1～4、ルカ 8：29）
- ⑤ 自殺の原因となる（マルコ 9：22）
- ⑥ 動物にとりつく（マルコ 5：11～12）
- ⑦ 偶像崇拝をさせる（申 22：17、ゼカ 13：2、ホセ 4：12、Iコリ 10：20）
- ⑧ 悪霊崇拝をさせる（レビ 17：7、イザ 65：11、黙 9：20～21）
- ⑨ 不潔・不道德の原因となる（ルカ 8：27）
- ⑩ 偽の教理体系を宣伝する（Iテモ 4：1、ヤコ 3：15、Iヨハ 4：1）
- ⑪ 信者の霊的成長を妨げる（エペ 6：12）
- ⑫ 信者を神の愛から引き離そうとする（ロマ 8：38）
- ⑬ 人間を内側からコントロールしようとする
- ⑭ オカルト（人間と悪霊との交信）（使徒 16：16 「占いの霊」）

## B) 安息日における悪霊の追い出し

1. カペナウムを拠点に宣教活動（マルコ 1：21～22）それから、一行はカペナウムに入った。イエスは、さっそく、安息日に会堂に入って教えられた。人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。
  - (1) それから・・・
    - ① イエスは、紀元 27 年の春、過越の祭りのときに、ユダヤ地方のエルサレムでメシア宣言をし、多くの人々の前でしを行われた（ヨハネ 2：23）。
    - ② その後、しばらくユダヤ地方で活動したが（ヨハネ 4：1～2）、先駆者ヨハネがヨルダン川対岸のペレヤ地方で捕らえられたと聞いて、ユダヤ地方を離れ、ガリラヤ地方に戻った（マタイ 4：12、マルコ 1：14、ヨハネ 4：3）。
    - ③ ガリラヤ地方に戻ったとき、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも過越の祭りに行っていて、イエスが祭りの間にエルサレムでしたことを見ていたからであった（ヨハネ 4：45）。
    - ④ ガリラヤのカナという町では、遠距離かつ即時の癒しの奇跡を行った（ヨハネ 4：46～54）
    - ⑤ ルカ 4：15、「イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された」。イエスは、ガリラヤ地方の町々を巡回し、安息日には会堂で教え、人々の称賛を受けていた。
    - ⑥ 故郷の町ナザレでは、イエスはイザヤ書からメシア預言の箇所を朗読したあと、「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました」と言って、自分自身をメシアであると宣言。続いて福音を語り、人々はイエスの口から出て来る恵みのことばに驚いた。しかし、イエスの生い立ちを知る故郷の人々にとっては、とまどいも生じ、結果的にはナザレの人々はイエスを拒否した。イエスは崖から突き落とされそうになったが、人々の間を通り抜けて、カペナウムまで歩いて帰った。
  - (2) 一行はカペナウムに入った・・・イエスは宣教活動の拠点をカペナウムに置いた。安息日、イエスはカペナウムの会堂に入り教えた。
  - (3) 人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。
    - ① イエスは会堂に入って、人々を教えようとした。問題は、それはどのような権威によるのか？ 一般的にラビたちは、彼らが所属する学派から権威を授かった。しかし、イエスはどの学派にも属していなかった。
    - ② 律法学者たちのように・・・ラビたちの教え方とは、連綿と続くその学派の先生たちの教えにさかのぼり、あの先生はこう言った、この先生はこう教えた、と述べて、その学派が形成してきた理論を語る。すなわち、律法学者た

ちの権威は、人間が築いてきた伝統に基づくものであった。

- ③ 権威ある者として・・・ラビたちとは異なり、イエスは、自分自身に権威がある者として語った。
- ④ イエスの権威は、どこから来たのか・・・ヨハネ 3:31~36 上から来たもの、すなわち父なる神からであった。

## 2. 悪霊の追い出し (マルコ 1:23~26)

(1) 《悪霊の叫び》 23~24 節 ちょうどそのとき、汚れた霊につかれた人がその会堂にいて、こう叫んだ。「ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」

- ① 会堂には悪霊につかれた人がいた。
- ② ユダヤ人たちがイエスをメシアとしてなかなか受け入れない、まして神ご自身が人となられたお方とは気づかない、そのような中で、悪霊は敏感にイエスの神性を察知した。「私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です」
- ③ しかし、イエスは悪霊による証しを必要とされなかった。

(2) 《イエスの命令》 25 節 イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。

(3) 《悪霊の反応》 26 節 すると、汚れた霊はその人を引きつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。

- ① ルカ 4:35 イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は、その人を人々の真ん中に投げ倒し、何の害も与えることなくその人から出て行った。
- ② マルコの記事とルカの記事を合わせると、次のとおり
  - イエスは彼がイエスのことを証しすることを許さず、叱った。
  - イエスは悪霊に対して、「黙れ。この人から出て行け」と命じた。
  - すると、悪霊は、
    - その人を引きつけさせた
    - その人は人々の真ん中に投げ倒された
    - そのとき同時に、悪霊は、その人の声帯を通して大声をあげながら、その人から出ていった
    - 出て行くときに、その人に何の害も与えていなかった

3. 人々の驚き、「新しい権威ある教え」（マルコ 1 : 27～28）
  - (1) ≪人々の驚き≫ 27 節 人々はみな驚いて、互いに論じ合った。「これは何だ。権威ある新しい教えだ。
  - (2) ≪驚きの理由≫ 27 節 この方が汚れた霊にお命じになると、彼らは従うのだ。
  
4. 当時のラビたちの手法とイエスでの実例（マルコ 5 : 1～13）
  - (1) 当時のラビたちの手法・・・悪霊の追い出しは、当時のユダヤ教の指導者たち、ラビたちも行ってた。その手法は、次のとおり
    - ① 悪霊に憑かれた人と向き合う。悪霊はその人の声帯を使って話すことができる。ラビは、悪霊に語らせるように仕向ける。基本的には穏やかに、ではあるが、場合によっては、悪霊をわざといら立たせて話を引き出すこともある。
    - ② 悪霊と話ができるようになったら、悪霊の名前を聞き出す。
    - ③ 名前を聞き出したら、すぐに、その名前を使って、「〇〇よ、この人から出て行け」と命じて、悪霊を追い出す。その際、儀式的な道具を使うラビもいた。また命じるときに、儀式的な定型文の祈りによった。その祈りの中では、力ある何かの名や、強力な権威を引き合いに出すことが一般的であった。
  - (2) イエスによる悪霊の追い出しで、この一般的な手法に近い事例は、マルコ 5 : 1～13。「レギオン」という名前を聞き出した。豚を追い出しの道具に使った。
  
5. 悪霊に対するイエスの権威
  - (1) イエスは、悪霊の名も探り求めず、即座にそして単に、「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊を追い出した。
  - (2) 当時のラビたちは安息日には、悪霊の追い出しのために道具を使うことや、儀式的な定型文の祈りをするのは、安息日の規定に違反すると教えていた。よって、事実上、安息日における悪霊の追い出しはできなかった。
  - (3) イエスは、当時のラビたちにはできなかった安息日に、当時のラビたちがしていた手法を使わずに、ただ命じるだけで、悪霊を追い出した。それゆえ、人々は「これは何だ。新しい権威ある教えだ」と驚いたのであった。
  - (4) これは、イエスが、悪霊に対するメシアの権威を示した出来事であった。